

## 宗教と寛容（四）

### —— 宗教の真理と宗教者の態度 ——

小 畑 進（東京基督教大学非常勤講師）

#### 第4章 キリスト教の諸宗教への視界

- (1) 浅深・劣勝と唯一・独一 …………… 30
- (2) 一般啓示・一般恩恵 …………… 33
- (3) 神学者たちの発言 …………… 39
- (4) 旧・新約聖書の視野 …………… 47

#### 第4章 キリスト教の諸宗教への視界

##### (1) 深淺・劣勝と唯一・独一

あるいは、評者は、なお細かく次のように言われるかも知れません。すなわち、かの最澄の天台《<sup>ごじはつきょう</sup>五時八教》・すなわち「五時」とは、經典を佛陀の説法順に配列せんとして、これを五つの時期に分類したもので、第一時は佛陀が悟ったまを華嚴經で説いた時期として、華嚴時と言い、第二時はいきなり佛陀の悟りの内容を理解しえない人々のために、程度を落として阿含經を説いて小乗の説法を試みた時期で、「阿含時」と言い、また説法の場所が<sup>ろくやおん</sup>鹿野苑であったので「鹿苑時」とも言われる。第三時は<sup>ゆいま</sup>維摩經や<sup>しょうまん</sup>勝鬘經などを説いて、小乗から大乘へ向かわしめた時期で、大乘の別名の方等<sup>ほうどう</sup>をとって「方等時」と言われる。第四時は、<sup>ほんにや</sup>般若經を説いて、大乘・小乗を別なものとする偏執を取り去った「般若時」。

第五時は人々の能力が進歩したので、いよいよ法華経で正しい真空の法を説き、それに洩れた者のためには涅槃経を説いたので「法華涅槃時」と言われます。以上が「五時」です。もちろん佛典は佛陀自身が説いたものではないのですが、当時は、みな佛説と信じて以上のように時代わけしたのであって、歴史的事実ではありません。

次に、「八教」は、「化儀の四教」と「化法の四教」とにわかれ、合わせて八教とします。そのうち、まず「化儀の四教」とは、(1)ただちに佛の悟った内容を教える「頓教」。(2)内容の浅いものから深いものへ進んで教化する漸教。(3)相互に知らせないまま、それぞれに適した説き方をする「秘密教」。(4)説く教は一定しないが、聞く者の能力に応じて体得させるような「不定教」で、第五時の法華涅槃時は非頓漸・非秘密・非不定であるとします。

もう一つの「化法の四教」とは、(1)その内容が小乗教である三蔵教。(2)方等・般若・法華涅槃に通じ、声聞・縁覚・菩薩の三乗に通じる大乘教である「通教」。(3)声聞・縁覚と別な菩薩だけの教で、他の三教と別な、またすべてのものを差別の面から眺める「別教」。(4)悟りも迷いも本質的には区別なく、佛の悟りそのままを説いた教で、あらゆるものが互いに融けあって完全に具わっていると説く「円教」で、華嚴・方等・般若時にも説かれるけれども、法華経の円教が最もすぐれているとします。<sup>(41)</sup>

この「五時八教」の教判にしても、空海の横の教判と呼ばれる《弁頭密二教論》・すなわち「二教論」とも略称され、顕教と密教との優劣・浅深を論じ密教は佛の悟りのままを説いた真実の教えであるとします。<sup>(42)</sup>

この「二教論」の教相判釈や、堅の教判と言われる《秘密曼荼羅十住

(41) 「新佛教辞典」(誠信書房, 1983年) 172-173頁。

(42) 「空海全集」第二卷(筑摩書房, 1984年) 147-219頁。

心論<sup>しんろん</sup>・すなわち十住心論と略称され、人間の宗教心を十段階にわけて組織し、真言の法門を最上位・極位におき、前九を顕教、第十を秘密一乘と宣揚します。<sup>(43)</sup>

この「十住心論」の教相判釈にしても、要するに、在来の佛教をもって一般的に<sup>あら</sup>顕わされた顕教と一括して、自己が明かす真言教は、法身佛・大日如来の秘密の教え、つまり密教こそ最高深遠であることを弁証するもので、そこで問われているのは、〈浅深・劣勝〉でこそあれ、〈唯一・独一〉と言うものではあるまい、と言われるかも知れません。あるいは、法然の《選択本願念佛集》<sup>せんちやくほんがんねんぶつしゅう</sup>にしても、言うところの選択とは劣を捨てて勝を取るの義であり、親鸞の説く《二雙四重》<sup>にそうしじゅう</sup>の教判にしても、諸他宗派が、自力で悟りを得ようとするのに対して、他力の信心を得て真実の浄土に往生しうる真宗の《横超》<sup>おうちよう</sup>の深勝を弁するもの、日蓮の《五段相對》<sup>ごだんそうたい</sup>、《四重興廢》<sup>しじゅうこうはい</sup>、《五重三段》<sup>ごじゅうさんだん</sup>と言った諸教判にしたところが、つまりは浅劣なる教法を捨てて、深優なるものを取るべきことをすすめたもので、法華經の最深最勝なることを弁証するものであった、と。そのほか、日本臨済の開祖・栄西の《興禪護国論》にしても、円禪戒密つまり天台円教も戒律も密教もあわせて、ただ禪本位とするというにあってたのであり、あの道元の《正法眼蔵弁道話》すら、

いまわが朝<sup>ちよう</sup>につたはれるところの法華宗<sup>ほっけしゅう</sup>・華嚴經<sup>けごんきやう</sup>、ともに大乘の究竟<sup>く</sup>なり。いはむや真言宗<sup>しんごんしゅう</sup>のごときは、毘盧遮那如来<sup>びるしゃなにょらい</sup>したしく金剛薩埵<sup>きんごうさつだ</sup>につたえて師資<sup>しし</sup>みだりならず。その談<sup>だん</sup>ずるむね、即心即佛<sup>そくしんそくぶつ</sup>・是心作佛<sup>ぜしんさぶつ</sup>といふて、多劫<sup>たごう</sup>の修行<sup>しゆぎやう</sup>をふることなく、一座<sup>いざ</sup>に五佛<sup>ごぶつ</sup>の正覚<sup>しやうがく</sup>をとなふ、佛法<sup>ぶつぽう</sup>の極妙<sup>ごくみやう</sup>といふべし。

(43) 同上 第二卷。

とし、ただ、

佛家には、教の殊劣を対論することなく、法の浅深をえらばず、たゞし修行の真偽をしるべし。<sup>(44)</sup>

として、坐禪に立つ自宗の真勝を弁じているのであって、キリスト教のような唯一とか独一とかと云った図式は描かれていないではないか、と言われるかも知れません。

なるほど、文面上ではそうでしょう。また、本来、大乘佛教自体が従来の佛説の上に立脚して発展したものである以上、お互いは同族なのであって、同族間の優劣、深淺の言い分は出ても、唯一・独一を言う素地はなかったのです。しかし、それはともかくとして、表向きは深淺・劣勝を弁じてはいながら、その実、極力他宗を難斥・排斥して自宗を主張していることは、各宗学・宗乘しゅうがく しゅうじょうを見ればわかることで、またそうあるのが当然でしょう。この表向きは浅深・劣勝的見地を弁じながら、実はおのが独一性を主張する佛教諸宗に対して、表向きはきわめて独一性を主張しながらも、反面、浅深・劣勝的な視野をもおさめているのが、キリスト教であると、申すことができるのではありませんか。

## (2) 一般啓示、一般恩恵

たしかに、キリスト教には、一般啓示・一般恩恵と言った視野が、富士の裾野のような広大なひろがりをもって、伸びているのです。つまり、他の諸宗教が、何らかの意味において、神を目ざし、救済を追及しているのは、神の啓示、自然の光の中にあらわされている神の一般啓示 (revelatio generalis) あるがゆえであると考えているのです。

そもそも、一方には、神知識をもって他の諸科学や哲学などと共に人

---

(44) 「正法眼蔵・弁道話」日本思想大系（岩波書店、1975年）十三巻 17-18頁。

間の自然なる開発・自己開明によって獲得しうるとして、すべてを一般啓示・自然啓示化する理神論風な合理主義的自然神学——キリストもまた神の世界における一般啓示の一個の実例なりとして、キリストにおける啓示の格別な意味を見すごして、キリストの啓示は、ただ啓示を富ましめ、広げるものとのみ評価して特別啓示を見失ってしまうヘーゲル流の神学<sup>(45)</sup>が、キリスト教の立場、聖書の立場を誤ったものであると共に、他方、すべてを、ただちにキリストから、神の言から直接引き出さねばならぬ (Christomonism) として、自然の中に働かれる神の御業を見失ったいわゆる実存主義神学流も、先の合理主義や自然主義的神学に反発するのあまりとは言え、一般啓示を捨象してしまうものであり、聖書の立場から片寄ったものと言わねばなりません。

アメリカの組織神学者ルイス・ベルコフは語ります。

宗教は人間生活の最も普遍的な現象の一つである。人間は時として《矯正不可能なほど宗教的》(incurably religious) と言われる。だがこのことは、本来人間が神の像において創造されたものであり、神との交わりにおいて生くべく定められているという事実をわきまえている我々にとっては、別に驚くに値いしない。たとえ、人間が神から墮落したことは真実なりとしても、その墮落は神の像の完全な喪失を意味するものではないのである。『ベルギー信条』は、「すべてにおいて悪くされ、よこしまにされ、汚されて、神から受けたすべての卓越せる賜物を失ったが、ただ幾分か、しかも言いがれえないためには十分なる、残存は保留した」と述べ (第十四条)、『ドルト信仰規準』には「人間には、しかしながら、墮落後も自然の光のほのめきが残存していて、それによって人間は神と自然の事物と善悪の区別とについて

---

(45) G. C. Berkouwer ; General Revelation (Eerdmans, 1955) P. 12ff.

幾らかの知識を保有しており、徳行と社会における秩序とについて、また規律ある身の振舞についていささかわきまえるところがある」(第四条)と述べられている。もっとも、この残存の光は、救いには役立たず、自然的・市民的事柄においても、人間によって乱用されてはいる。けれども同時に、それは他の最も低次な最も未開な諸種属の間にも何らかの形の宗教が存在していることを説明するのに役立っている。<sup>(46)</sup>

このような神の像の人間における残存という面において各宗教がとらえられているのであり、次のカルヴァンの言葉も、この面への視野をおさめているものです。

神がいますという信念を抱かないような未開な国民は一つもなく、野蛮な人種は一つもない(キケロ「神々の性質について」)。しかして、他の方面では、獣と異なると見えるところがきわめて少ない者らも、常に、宗教の或る種子(semen religionis)を保持している。この普遍的な豫覚は、かくまでも徹底的に萬人の心を占有し、かくまでも堅く萬人の内腑ないふ ねんちやくに粘着している。それゆえに、原初よりして、世界中、よく宗教を欠けるいかなる地域、いかなる個処、最後にいかなる氏族もなかったので、ここに、神についての観念が萬人の心情に録されているという或る暗黙の告白がある。いな、また偶像礼拝が、この観念に対する大いなる証拠である。けだし、他の被造物を自己の上に仰ごうとして、いかに心ならずも人間が自己を卑下するかを我れわれは知っている。これをもって、人間はいかなる神をも有しないとされるよりは、むしろ木や石を拝もうと欲することによって、神威のこの印銘しれつのきわめて熾烈であることを明示する。この印銘を人間の精神より抹まつ

---

(46) L. Berkhof: Introductory Volume to Systematic Theology (Eerdmans, 1979) R100.

殺<sup>ころ</sup>することは難く、それよりも天性の感情を破砕することの方が、容易である程である。<sup>(47)</sup>

また、オランダの教義学者ヘルマン・バーフィンの言葉も参照しておきましょうか。

宗教と啓示とは緊密に結び合い、互いに切りはなすべからざるものであることは明々白々たることである。すべての宗教は、世界の上に超越して君臨しながらも、なお世界に働き、それによって自らを人に知らしめ、人と交わるところの人格的な神に対する信仰に基づくという意味において超<sup>スーパーナチュラル</sup>自然的である。今は、その神が何によって、いかにみずからを啓示するか、自然においてか、歴史においてか、人の精神を通してか、それとも心情を通してか、通常の方法でか、それとも非常の方法でか、は問わない。ただ確実なことは、すべての宗教は、それぞれの理想とするところに従ってではあるが、神の意識的・自発的な啓示に基づいているということである。この事は、人間が宗教の中で求めているものを考察することによって確められることである。<sup>(48)</sup>

さらに、ローマ・カトリック教会の『第二バチカン公会議』にいたっては、次のように宣言しました。

世界中に見られる他の諸宗教も、種々の道、すなわち、種々の教義と戒律と儀式を提示することにより、いろいろな方法で人間の心の不安を解消しようと努力している。

---

(47) カルヴァン著「キリスト教綱要」一篇三章一節。

(48) Herman Bavinck: The Philosophy of Revelation (Eerdmans, 1909) P. 163.

普遍なる教会は、これらの諸宗教の中に見出される真実で尊いものを何も避けない。これら諸宗教の行動と生活の様式、戒律と教義を、まじめな尊敬の念をもって考察する。それらは、教会が保持し、提示するものとは多くの点で異ってはいるが、すべての人を照らす「真理」の或る光線を示すことがまればではない。しかしながら教会は絶えずキリストを告げ、また告げなければならない。キリストは「道であり、真理であり、生命であり」（ヨハネ一四の六）、キリストにおいて人は宗教生活の充満を見いだすのであって、キリストにおいて神は万物を御自分と和睦させたのである（「キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言・2」）

なお、この議案を起草訂正したキリスト教一致推進事務局長ベア枢機卿は、一九六四年十一月十八日に、この「キリスト教以外の宗教に対する教会の態度の宣言」の草案を公会議に提出するにあたって、次のように宣言しています。

「キリスト教以外の諸宗教に関する諸原理が、このように公然と公会議において述べられるのは教会の歴史上初めてのことである。われわれはこの問題の重要性を十分に知らなければならない。キリストとその救済の業を知らない人々、またそれを認めない何十億という人々の救いに関する問題である。キリスト教会に属さない人々が、もし良心の命令に忠実であるならば必ずや救われるべきものである。したがってわれわれ教会に属するものが、この問題に関して何らかの方法をもって教会の人々と話を交え対話をすることは、われわれにとって重大な義務である。教会は諸宗教の中に見出される精神的、道徳的な価値を認め、尊敬の心をもって、諸宗教を信奉する人々と話し合うように心がけなければならない」（公会議解説叢書「世界に開かれた教会」・南山大学監修・中央出版社 494～495頁）。

もっとも、こうした発言の意味は、「キリスト教こそ唯一の天啓の教

と信じているが、他宗教の人々と交わることによって、種々の方法で人間の心に働きかける神の理解を深めることができる。公会議の諸宗教に関する宣言は他宗教との妥協を説くものではなく、諸宗教の存在の意味を認識し、それに対する態度を明らかにしたと言える」と解説され（同書503頁）、「公会議において、キリスト教以外の人も、福音を知らないでいても、良心に従って生活した人は救霊を得る可能性がある」と述べられていることは、全く理論上の問題であって、どういう手段で可能であるかは全く窺知する由もなく、全く秘義に属することである。救霊は神の恵みであるとするれば、神はわれわれには理解できない方法をもって狭義において教会員でない者に対しても、神を求める良心をしりぞけない（教会憲章16参照）ということは首肯できる。福音を知らないで死んだ親族、知人をたくさん持つ日本の信者にとっては、少なからざる慰安であるとともに、教外者たちはそれを聞き、カトリック教会の普遍性をよろこぶであろう」と、敷衍されてもいまず（同書534頁）。(49)

ここに「<sup>プレローマ</sup>充満」という文字が見えているのはローマ教会の“自然神学”の視野を表明しているものとも思われて意義重大なものです。それに、歴史学者としてアーノルド・トインビーの所説も付け加えてあげておきましょう。

では、悔い改めたキリスト教徒は、他の高等宗教およびその信徒に対して、一体いかなる態度をとるべきであろうか。わたしの思うに、われわれが、一方ではわれわれ自身の信念を真実にして正当であると信じつつ、他方ではすべての高等宗教もまた真実にして正当な信念を

---

(49) 公会議解説叢書「世界に開かれた教会」・南山大学監修（中央出版社、1969年）494-495頁、503-534頁。

ある程度まで啓示していると認める、というような態度をとることは、決して不可能ではないはずである。他の宗教も神よりきたり、それぞれに神の真理のある面を示している。それらによって人間に与えられた啓示の内容と程度は異なっているかも知れないし、事実異なっている。また、その啓示を信徒が個人的ならびに社会的に実践に移す度合いは異なっているかも知れない。しかし、われわれは、それらの宗教もまたわれわれ自身の宗教の精神的光明と同じ源泉から発している光明であることを認識してしかるべきである。神が万人の神であり、また愛なる神であるかぎり、当然そうあるべきである。<sup>(50)</sup>

### (3) 神学者たちの発言

さらに歴史をさかのぼって見ますと、かの原始教会に輝くサマリヤ出身の殉教者ユステイヌス（110～115）は、ソクラテス、プラトンの哲学に参究したのちに、ナザレのキリストに出会った使徒後時代の教父であり、その哲学的教養とその殉教のゆえに出色の人物です。彼は次のような言葉を残して、いわゆる宗教学者たちを喜ばしめます。

人は我れわれに対して叫ぶであろう。彼（キリスト）以前に出生した者たちは、すべて責任を負いえないではないか、と。—そこで、我れわれはこれを見越して、その難題を解いておこうではないか。我れわれは、キリストが神の初子であると教えて来た。そしてまたキリストがあらゆる民族の者らがあずかるころの“言”（ロゴス）であるとも宣明して来た。“言”によって生活するものは、たとえ無神論者であると思われていてもクリスチャンである。ギリシャ人の間ではソクラテスやヘラクレイトス、また彼らのような人たち。未開人の間では、アブラハムやアナニヤやアザリヤや、ミカエルやエリヤなど、その他多勢の人々の行動や名

---

(50) Arnold Toynbee : Christianity among the Religions of the world 「現代宗教の課題」(社会思想社・山口光朔訳, 1980年) トインビー著作集4巻 535-536頁。

前をここであげることは、退屈なことと思うゆえ控えておこう。

たとえ、キリスト以前に生きていた者でも、“言”なくして生きた者は悪しき者であり、キリストに敵対する者であり、“言”にそって生きていた者をあやめた者である。けれども“言”の力によって、御父なる神と、万民の主——人として処女より生まれ、イエスと名づけられ、十字架につけられ、死に、再びよみがえり、天に昇られたる——の御意にそった知的な人は、すでに大いに語られて来たところからして理解しうることであろう。<sup>(51)</sup>

彼によれば、“言”(ロゴス) そのものはイエス・キリストとなって来臨したとは言え、部分的にはソクラテスもプラトンも、“言”にあずかって、その哲学を述べた者なのです。そして、その意味において、クリスチャンであると。<sup>(52)</sup>

なお、近世に入って、スイスの宗教改革者ウルリッヒ・ツヴィングリ(1484～1531)は、偉大なる異教徒は、みな天国にあるとして、ルターを驚愕させています。すなわち、ツヴィングリは、フランス王フランシス一世に献げた『キリスト教信仰解説』(1530～1531)なる著作の“永遠の生命”論において、論敵アナバプテスト一派が「死者の靈魂(Anima)は肉体の死と同時に眠り、再臨の時まで肉体と共に墓中にとどまる」とするのに強く反対して、靈魂は死と同時に神のもとに引き上げられ、そこで再臨の時を待つものであると、正しく論じたのち、問題の発言をなすのです。

このゆえに、私たちの信ずるところによりますと、信者たちの靈魂

---

(51) Justin Martyr : The First Apology. Chap. XLVI The Ante — Nicene Fathers (Eerdmans, 1950) Vol. P. 178.

(52) 同上書 Chap. LIX. P. 182.

(Anima) は、それらを宿していた肉体を離れるや、即座に天に引き上げられ、そこで意識 (Numen) と一緒に永遠に護られるのであります。いとも敬虔なる王〔フランシス一世〕よ、もしも陛下が旧約のあのダビデ、ヒゼキヤ、ヨシヤの諸王たちのように、神から賜わったこの偉大なる出来事を信ずるならば、〔陛下が天に赴かれる時〕次の事が起こるはずでございます。まず、陛下は〔信者たちの〕意識 (Numen) そのものを、その実体において見、しかも多種多様の機能・能力ごとの種類にあって見られることでしょうか。そして、そのすべてが疎隔してでなく豊富に。だからと言って、飽和状態にでなく自由かつゆったりとしながら、風や流れに影響されることもなく浮遊しているのを、眼のあたりにされることでしょうか。また、それらが降下して、永続的に海と地の深淵とを充満させる間、地上の人間が経験するような疲労を覚えることなく、余裕綽々<sup>しゃくしゃく</sup>と、あるいは、むしろ常に新しい生命を、その中に沸きあがらせているようにしているのを御覧になるはずでございます。かくのごとく、私どもが喜悅するであろうもの〔=天における生命〕は、永遠の善であります。そして、永遠なるものは決して消失<sup>きまま</sup>されることがないゆえ、何人も嫌悪〔ないし氣俵〕にとらわれることはありません。実に、この生命は永遠にして、常に新しく不変なのでございます。

次に陛下が期待され、かつ見られるであろうのは、聖潔、思慮、信仰心、堅実、不撓不屈等の徳目に富んだすべての人々が共に会合し、居住している交わりであります。この交わりの中に、陛下は次の人物たちを認められるでしょう。二人のアダム（贖われし第一のアダムと贖罪主たるキリスト）、アベル、エノク、ノア、アブラハム、イサク、ヤコブ、ユダ、モーセ、ヨシュア、ギデオン、サムエル、ピネハス、エリア、エリシャ、イザヤと彼が預言して神を宿すと言われた処女〔=マリア（イザヤ7:14）〕、ダビデ、ヒゼキヤ、ヨシヤ、バプテスマのヨハネ、ペテロ、パウロ、さらにはヘラクレス、テシウス、ソクラテ

ス、アリスチデス、アンティゴヌス、ヌーマ、カミルス、カトー、スキピオ、陛下の祖先にあたるルードヴィヒ大王、ルードヴィッヒ、フィリップ、ペピン、そして信仰をもって、ここに到着した陛下の祖父が一人一人が。そして〔地上で〕不善であった人間は、地上から離れる時より世の終末まで（この終末は、陛下は神と共にあられるため経験することはないでしょうが…）思いも聖からず、信仰心のある靈魂を持つこともなく、とどまりましょう。それゆえ、誰がこれ以上に喜ばしく、これ以上に望ましく、かつ光栄に満てる光景を考えることができましょうか。<sup>(53)</sup>

十六世紀宗教改革の巨星でありながら、どちらかと言えば、ヒューマニスティックであり、ローマ・カトリック軍と、カッペルで戦い、みずからも戦死をとげたツヴィングリの所説は、いかにも、彼らしいことですが、彼は、ギリシャ神話の英雄ヘラクレスと、これまた伝説的存在たるアテネの王テシウス、そしてギリシャの哲学者ソクラテス、政治家、軍人たるアリスチデス、アンティゴヌス、ローマの政治家たちヌーマ、カミルス、カトー、スキピオ等、そしてルードヴィッヒ大王以下フランス諸王を天国に思い描いているのです。

もとより、この所論は、ルターの公けの批判を招き、スイスの宗教改革者たちの間でも否認されたようです。今、少々長くなりますが、ルターの『聖なる礼典の短い信条』における批判をあげておきましょう。

ツヴィングリの死後、その死の直前に<sup>あら</sup>著わされたという『キリスト教信仰解説—キリスト者なる王へ』と題された小冊子が世にあらわされた。それは、彼がこれまでに著わした多くの書物の精粹であると言

---

(53) Expositio Christianae Fidei : Huldrich Zwinglis Werke, ed. Schuler und Schulthess, 1828-42. Vol. 4. P. 65.

われている。その書が彼ツヴェングリ自身のものに相違ないことは、例の熱情的で粗野な表現と、昔かわらぬ見解が明らかにしているところである。そのような小冊子の出現に、私は大変驚かされたのであるが、それは決して私のためではなく、ほかならぬ彼その人のためを思っていることであつた。…もしも、神に背く、このような異教徒たち、つまり、ソクラテスやアリスチデス、それどころか、聖アウグチヌスが、『神国論』の中で述べているように、悪魔の啓示によってローマで初めて偶像崇拜を確立した、あの恐るべきヌーマ、さらにはエピクロス派のスキピオなどが、神や聖書、福音やキリスト、洗礼や聖餐、あるいはキリスト教の信仰などについて、何ひとつ知らないというのに、天上にあって族長や預言者や使徒たちと共に至福に聖らかに暮らしているというのであれば、洗礼や聖餐、キリストや福音が、あるいは預言者や聖書が、どうして我れわれにとって必要とされるのであるか。私は一人のキリスト教徒でありたいと願う人から是非聞かせてもらいたいものだ。そのような筆者や説教者や教師は、キリスト教信仰があらゆる信仰と同一のものであり、たとえ、どのような人間であれ、それがヌーマやスキピオのような偶像崇拜者であれ、快樂主義者であれ、その信仰においては、至福になることができるのだということ以外、キリスト教信仰について、いったい何を信ずることができるであろうか。<sup>(54)</sup>

聖書学者ルターの強い不満が伝わって来るところですが、今はともかく、諸他宗教に対する態度について、ツヴェングリの発言と、あわせてルターの疑問とを、参考に供しておく次第です。

近世に入って、プロテスタントの神秘家ヤーコブ・ベーメ（1575～

---

(54) Kurzes Bekenntnis Doctor Martini Luthers' Vom heiligen Sakrament, 1545. Erlangen ed. Vol. 32. S. 399.

1642) は、異教徒の救いをも期待します。

精霊は次のように語る。汝のもつ学問こそもたないが、しかし憤怒に対して闘う多くの異教徒は、汝に先立って天国をうるであろう。彼らの心が神と合致するならば、誰が彼らを裁こうとしようか。たとえ彼らがこれ（キリスト教の神）を知らなくとも、彼らはそれでも神の精神において働いているのだと。<sup>(55)</sup>

異教徒が、生きた神に向かい、正しい信頼のうちに神の意志に身を委ねるならば、彼は、救われるであろう。<sup>(56)</sup>

信仰はただ神のうちに働く…それは自由であり、正しき愛以外のいかなる箇条にも縛られない。

なお、次のベーメの言葉も、彼の無教理、無教條の立場を物語っています。

「あれやこれやの私見から汝は神を求めようとする。一人は教皇の私見に、他はルターの私見に、三番目の人はカルヴァンののに、四番目はシュヴェンクフェルトのに等々、私見には限りがない…この世でそれらが何となえられようともすべての私見を捨てよ、それはすべて理性の争いにすぎない。人は新たな再生や宝石を争いのうちに、したがってまた賢い理性のうちなどに見いだしはしない。汝はこの世にあるすべてをそれがどのように仰々しくとも投げ捨てて汝自身の内へおもむ

---

(55) ヤコブ・ベーメ全集（シーブラー版）II. S. 229.（メンシング「宗教における寛容と真理」。理想社、83頁より）

(56) 同上書 83,84頁。

かねばならぬ」<sup>(57)</sup>

これは、彼が神秘的宗教体験という、言わば普遍的性格を有する共同体験に全面的に依拠したところから醸成されたもので、真理の有する「知」的側面を彼が無視していたことを物語るものです。彼が言うところの「愛」とは何か、しかも「正しき」愛と言われた時、正しさとは何か、という問題が当然掘削されなければならないわけです。宗教が『感情』や『意志』を座とするばかりか、『理性』にも座を占めるものであることを見落としたものですが、この際、キリスト教界の幅の広さの一例として、あげた次第です。

また、これと関連して、きわめて預言者的な調子の内村鑑三の言葉も参考に供しましょう。

余輩は名に就て争わず、実に就て争ふ、「佛陀」なりと斥けず「基督」なりとて迎えず、余輩は万物の中に充滿する愛の心を遵奉す、神は愛なり、愛なき者は神を知らず、余輩も亦聊か愛の何たるかを知る、故に愛の在る所に余輩の神を認め、其名の異同の故を以て取捨向背を決せざるなり。<sup>(58)</sup>

神を愛し人を愛する事なり、我が礼拝は是れなり、我が信仰は是なり、我が奉仕は是れなり、是を除きて我に宗教なるものあるなし、教会は何物ぞ、儀式何物ぞ、教義何物ぞ、神学何物ぞ、若し我に愛なくば我は無神の徒なり、異端の魁なり、我れ口と筆とを以て我が信仰を漂白したればとて我は信者に非ず、我は愛する丈けそれ丈け信者たるのみ、我が愛以上に我が信仰あるなく、又我が愛以下に我が宗教なる

(57) ヤコブ・ペーメ全集（シーブラー版）II. S. 229 前掲書。

(58) 内村鑑三随筆集（岩波文庫，1938年）158頁。

ものあらざる也。<sup>(59)</sup>

或いはまた、近代主義神学の父と言われる F. D. E. シュライマツヘル（1768～1843）は、その著書、『宗教について—宗教蔑視者中の教養人に寄せる講演』の第五講「諸宗教について」において、全宗教の偉大なる統合を讃美しています。

何人も宗教を完全に持ち得ないということは、誰にも理解しやすいことである。人間は有限であるが宗教は無限だからだ。しかし宗教は謂はばただ部分的に、各人がそれを理解し得る範囲で人々の間に分割され得るものではなく、進んで互に相異なる諸現象において組織さるべきものと言っても諸君は奇異に思ふまい。…諸君は一般に宗教に関する概念のみを持つとするのではなかろう。もしかかる不完全な知識に満足するとすれば、それはまことに無意味である。のみならず、宗教はその現実の姿において、またその現象において理解し、これを宗教とともに、無限をさして進む世界精神の所産として直観しようとするれば、諸君はただ一つの宗教の存立を願う無益な希望を断念し、それが多数存在することに対する反感を抛棄するとともに、かくすることによってその変化する形態の内に、しかもこの形態においても進歩をつづける人類の行路において永遠に豊かな宇宙のふところから展開した一切のものに、できる限りとらわれない心で近づかなければならない。<sup>(60)</sup>

ヘルムフト派の牧師の家に生まれ、スピノザ流、カント風の彼にし

---

(59) 同上書 160頁。

(60) シュライエルマツヘル「宗教論」Friedrich D. E. Schleiermacher : uber die Religion. Reden an die Gebildeten unter ihren Verchtern（岩波文庫、1975年）198, 199頁。

て語る宗教学者の言説です。以上、ユスティヌス、ツヴィングリ、ベーメ、シュライマッヘル、あるいは内村鑑三の所説が、多分に情緒的、個性的で現状打破的な時代的反映のゆえに行きすぎたところがあり、その点は明確に指摘しなければなりません、キリスト教界の発言の幅の広さの例としてあげたわけです。

#### (4) 旧・新約聖書の視野

ともかくも、何よりも、聖書においては、キリストにおける特別啓示の必須性を説く一方、だからと言ってキリストを知らざる者たちが、神知識において完全な無智の中に放置せしめられていたとは申しないのであって、世界伝道者パウロは、ルステラの町で初めてキリストについて聞く人々に向かって、次のように説いています。

過ぎ去った時代には神はあらゆる国の人々が、それぞれ自分の道を歩むことを許しておられました。とはいえ、ご自身のことをあかししないでおられたではありません。すなわち、恵みをもって、天から雨を降らせ、実りの季節を与え、食物と喜びとで、あなたがたの心を満たしてくださったのです〈使徒14:16.17〉

実際、旧約の詩人ダビデは、歌っています。

天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる、昼は昼へ、話を伝え、夜は夜へ、知識を示す。話もなく、ことばもなく、その声も聞かれない。しかし、その呼び声は全地に響き渡り、そのことばは、地の果てまで届いた〈詩19:1~4。ローマ10:18参照〉

新約の使徒パウロにおいては、

不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対して、神の怒りが天から啓示されている。〈ローマ1:18〉

とされ、あるいは、神の律法は万人の心に<sup>きざ</sup>刻みこまれているとして、

彼らはこのようにして、律法の命じる行ないが彼らの心に書かれていることを示しています。彼らの良心もいっしょになってあかしし、また、彼らの思いは互いに責め合ったり、また、弁明し合ったりしています。〈ローマ2:15〉

彼らは、そのようなことを行なえば、死罪に当たるという神の定めを知っていながら、それを行なっているだけでなく、それを行なう者に心から同意しているのです。〈ローマ1:32〉。

と語り、

なぜなら、神について知りうることは、彼らに明らかであるからです。それは神が明らかにされたのです。神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。〈ローマ1:19,20〉

として、神の啓示の普遍性を主張しています。諸宗教も、実はこの神知識の普遍性、換言すれば神の自然における啓示にあずかるがゆえなのです。すなわち、宇宙の宏大・精妙・均整・美麗な構造・運行にあらわれた御業を通して、神は創造者としてのご自身を啓示され、あるいは人間の良心の中に印銘されている義なる審判者としてのご自身を啓示されたのであって、それあればこそ、たとえ背き誤れる方向、低劣な形、真の

救いなき道においてはあるとしても、神的なものや救いを目ざす諸宗教が成立していると見るのです。第一、かかる人類一般に与えられている自然啓示なくしては、世界中に《神》なる概念も、《神》なる文字すらありえなかったことでしょう。

使徒パウロは、文化の源泉地アテネにおいて、当時の人々の宗教心にふれ、人々が漠然と何ものか知りえずに拝んでいる神の真の姿を提示して、人々が希求してきた救の真の道を指示せんとして、その有名な説教を語り出しています。

アテネの人たち、あらゆる点から見て、私はあなたがたを宗教心にあつい方々だと見ております。〈『使途の働き』17:22〉

この「宗教心にあつい」と邦訳されている言語（ホース・デイシダイモネステルス）は、欽定英訳では、“too superstitious”「きわめて迷信ぶかい」と訳されています。しかし、アメリカ標準英訳では“very religious”「非常に宗教心に富む」と訳されています。ルター訳も *gar sehr die Götter Fürchtet* 「非常に敬神の念のあつい」としています。

一方は「迷信ぶかい」とし、他方は「宗教心のあつい」として意味が逆となっているのです。実は、ここに一般啓示をどのように解するかという古来からの問題があらわれているのです。

語義を見てみますと、デイシダイモンはデイドー「おそれる」とダイモン「神」との合成語ですが、ギリシャ人たちは、これを「敬虔な」とか、「宗教心のあつい」という善い意味にも、「迷信ぶかい」といった悪い意味にも用いているのです。セイヤーは、パウロが「親しく両義的に」用いたものと示唆しています。ページはほとんど迷信とも言うべきアテネ人の宗教心情をあらわすために、ルカがこの言葉を用いたのだと考えます。ヴルガーテ訳は、“superstitiosiores”とし

ます。使徒25:19では総督フェストは「宗教」にこの言葉をあてています。パウロが、冒頭から聴衆を面罵したとは思えませんし、この説教全体の調子から言っても、ここは21節におけると同じように彼らが普通以上に宗教熱心であることを言ったものととれましょう。ともかく、アテネ人は宗教熱心で有名であったのであり、町は「偶像でいっぱい」だったのです。<sup>(61)</sup>

私が道を通りながら、あなたがたの拝むものをよく見ているうちに、「知られない神に。」と刻まれた祭壇があるを見つけました。そこで、あなたがたが知らずに拝んでいるものを、教えましょう(使徒17:22～23)。

と。また、

これは、神を求めさせるためであって、もし探り求めることでもあるなら、神を見いだすこともあるのです。確かに、神は、私たちひとりひとりから遠く離れてはおられません。私たちは、神の中に生き、動き、また存在しているのです。あなたがたのある詩人たちも、「私たちもまたその子孫である。」と言ったとおりです(使徒17:27,28)。

として、ギリシャの宗教の中に生きた詩人の詩句をさえ活用し、訴えているのです。

このように—カルヴァンは言います—

神の個々の業のうちに、なかんずくそれらの業全体のうちに、神の

---

(61) Robertson ; Word Pictures in the New Testament III (Baker, 1933) PP. 284-285. Grammer PP. 664.

徳能が描かれていること、あたかも書板におけるのと異ならず、これにより全人類が神についての認識へと招致され、誘引<sup>ゆういん</sup>され、またそれによって、真にして十全なる福祉へといたり得ることが告白せられるべきである。<sup>(62)</sup>

のですが、このような顕示が人間の洞察によって、正しく十分に理解されることなく、<sup>(63)</sup>「かくも燦爛たる劇場にあって盲目となつて<sup>(64)</sup>いる」のであり、

虚妄と、実にその高慢との結合は、悲惨なる人間たちが神を探求する際に、当然のこととして、彼ら自身を越えて上昇することなく、ひたすら彼ら自身の肉によれる愚昧<sup>ぐまい</sup>によって神を測り、そして健全な研究をおろそかにし、好奇的に、虚妄な思策へと馳せ行くという事に暴露されてしまう。こうして、彼らは神を神の顕示したもう姿において理解せず、彼らの無思慮<sup>むしりょ</sup>が捏造したものをもって神であると想像する。<sup>(65)</sup>

のであり、

人間は、もしも天性だけにしか教えられないとすれば、何ら確実な、或るいは堅実な、或るいは明晰な知識を有せずに、混乱した原理に結びつけられ、かくて《知らざる神》を拝むに至るのである。<sup>(66)</sup>

(62) カルヴァン「キリスト教綱要」一・五・一〇。

(63) 同上書 一・五・一四。

(64) 同上書 一・五・八。

(65) 同上書 一・四・一

(66) 同上書 一・五・一二。

ここに神は、

老人や、眼の爛れたもの、また何らか眼のかすんでいる者たちの前に、きわめて美しい書物を置いても、何かが書かれていることは知るとは言え、ほとんど二つの言葉を連続することができないけれども、眼鏡の介在かいざいに助けられるとき分明に判読し始める。<sup>(67)</sup>

ように、「言葉」の光、すなわち《聖書》を加えられたのであって、

そのように聖書は、元来混乱している神についての知識を、我れわれの精神のうちに結集し、暗霧を払いのけ、明瞭に真の神を示すのである。<sup>(68)</sup>

まこと、

人間は、このきわめて壮麗な劇場に、その観衆たるべく置かれているので、心して両眼を神の業の考察に向くべきであると共に、一層善く資するところあらんがために、耳を御言葉に急ぎ傾くべきなのである。<sup>(69)</sup>

それこそ、『辯頭密二教論』の次の一節が反響してくるようです。

より深密なる教えに踏み入ろうとしない者は、あたかも、羝羊が垣根につかえて進めないようなものであり、また、旅人がかりの関所を本当

---

(67) 同上書 一・六・一。

(68) 同上書 一・六・一。

(69) 同上書 一・六・二。

の関所と思って休息しているようなものである。これらは、佛道修行の究極にまで達することなく、途中の段階において停まる者や、楊柳の黄色の葉を黄金と思って喜び遊んでいる幼児のように、限りない宝蔵、量り知れない功德を有しているわれわれ自身の本性に気づくことはない。<sup>(70)</sup>

神は、そのような無知の時代を見過ごしておられましたが、今は、どこでもすべての人に悔い改めを命じておられます〈使徒17:30〉

と言う言葉は、ローマ人に向けて彼パウロが発した言葉、

世々にわたって長い間隠されていたが、今や現れられて、永遠の神の命令に従い預言者たちの書によって、信仰の従順に導くためにあらゆる国の人々に知らされた奥義の啓示によって〈ローマ16:26〉

あるいは、ヘブル人に対する手紙冒頭の

神は、むかし先祖たちに、預言者たちを通して、多くの部分に分け、また、いろいろな方法で語られましたが、この終わりの時には、御子によって、〈ヘブル1:1.2〉

と言った言葉とも共鳴して、それこそ先に見た空海の「顕・蜜」論にも似た視界がひらけていたと申せましょうか。

(五) につづく

---

(70) 「辯顕密二教論」「空海全集」第二卷（筑摩書房、1984年）147-219頁。